早期ストマ閉鎖術導入10症例の短期成績

【目的】

本邦において、直腸癌手術の一時的人工肛門ｄｄ、通例では3か月程度の期間をあけて、閉鎖術を施行されており、早期（初回術後2週間以内）の人工肛門閉鎖術の実施数は少ないのが現状である。今回、当院において早期人工肛門閉鎖術を10例の患者に行い、その安全性と有効性についてこうほうしてきに検討を行った。

早期ストマ閉鎖の安全性と有効性を　見るために　広報誌的におこなった

【対象と方法】

10例。

。対象は、2018年1月から2020年11月において、低位直腸癌に対して早期の人工肛門閉鎖術を施行した10症例を対象に検討を行った。

術後に明らかな合併症、明らかな縫合不全がなく、患者が希望した場合に検査し、問題ない症例をおこなった。

【成績】

性別は男性が5名、女性が5名。年齢は平均64.1歳（中央値　プラスマイナス２ｓｄ）（ー）であった。2例は術前化学放射線治療を行っていた。癌の局在としてはRaRS症例が2例、Ra症例が1例、Rb症例が5例、多重癌(RS,Ra)が1例であった。

AVの情報

術式は全例腹腔鏡下低位前方切除術を行い、そのうち７人はTaTME（経肛門的直腸間膜切除術）併用で行った。病期分類はcT1-3,cN0-1a,cM0, cStageⅠ-Ⅲb (第9版大腸癌取り扱い規約)であった。初回手術後に平均8.5日（6日～14日）の間に内視鏡検査、注腸検査を行い、吻合部が問題ないことを確認し、入院期間中に人工肛門閉鎖を行った。

縫合不全の率～～

SSI～～

初回手術において、明らかな合併症、その後の内視鏡検査、注腸検査が問題ないことを確認し、初回手術から平均12.2日（9日～14日）でストマ閉鎖を施行した。

ストマ閉鎖術は全身麻酔下で行った。剥離授動、Stoma腸管切除後、FEEAで吻合を行なった。皮膚は巾着縫合し、解放創とした。ストマ閉鎖術の際の出血量は平均　49.6ml（2ml-3２6ml）であった。手術時間は平均62分（21分-126分）であった。

SSIは何パーセント、グレードで2症例に表層の創部感染が見られ、1症例はストマ創部を開放し、さらに内服抗菌薬を使用した。もう一方の症例はストマ創部開放のみ行った。 その他の患者は、明らかな合併症は見られなかった。

術後縫合不全が顕在化した症例はなかった。

食事開始は術後2日で通常開始されたが、排ガスが少ないと判断された２症例は術後6日目で開始された。しかし、いずれの症例も嘔吐は見られず、イレウスに至った症例はなかった。 総入院期間は平均２４日（２０日〜２８日）であり、ストマ閉鎖後から退院までの期間は平均7.9日（7日〜10日）であった。退院後３０日間で明らかな合併症は見られなかった。

【結論】

直腸癌における一時的人工肛門に対して、早期人工肛門閉鎖術は安全に施行可能であると考えられる。

本文中にうちの通常の平均滞在時間。

コストは比較を書く。